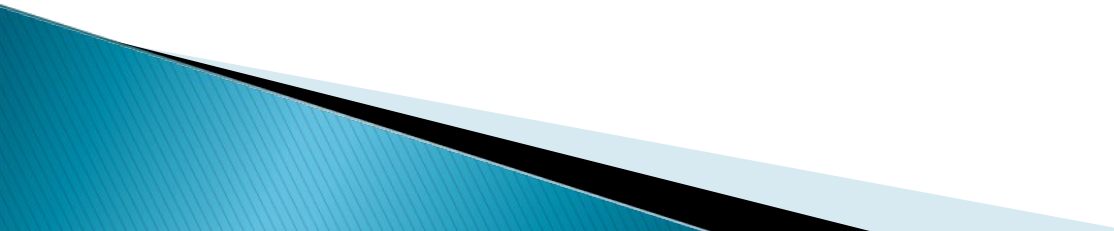


平成26年度 SSR 産学戦略的研究フォーラム
「大規模複雑な自己適応システムの適応進化
制御手法に関する調査研究」
第7回ミーティング

電気通信大学 田原 康之
2015/2/9

議事次第

- | | |
|-----------------------|-------|
| 1. 論文調査進捗報告 | 田原 |
| 2. 事例調査と論文調査の
進め方案 | 田原 |
| 3. プロジェクトのまとめ方案 | 田原 |
| 4. 意見交換 | 出席者全員 |
- 

事例調査の進め方案

- ▶ IPA 発行の2部の教訓集に記載の各教訓に対し、次の観点で分担して調査
 - 教訓集は Google ドライブ内の「事例調査」フォルダに配置
- 1. 「事例一覧」ファイルと「教訓＋事例.pdf」ファイルから調査対象を選定
- 2. 選定した教訓の詳細を、できれば自身の業務や研究分野に照らして把握
- 3. 可能であれば、自己適応システム技術の適用可能性を検討

論文調査の進め方

- ▶ 次の2つの方向で進める。
 1. 調査担当者自身の研究への発展を目指す方向
- ▶ したがって、自己適応システムの観点にはこだわらなくても良いものとする
- 2. 上記事例調査の結果を踏まえ、教訓への活用により現実の問題事例の解決を目指す方向
- ▶ ただし事例調査の結果を待つ時間は少ないので、できれば自身で事例調査と論文調査を同時に進める

論文調査の進め方

2. (続き) 具体的には、

- ▶ 調査対象論文のアプリケーション分野に近い事例を選択
- ▶ 論文の手法、または関連する従来研究の手法により、事例の障害にどのように対応できるか、の観点で検討し、スライドにまとめる

論文調査の進め方(例)

- ▶ Chen et al., “Self-adaptation through incremental generative model transformations at runtime” in Proc. of ICSE 2014.
- ▶ 概要
 - モデルベース自己適応システムにおいて、要求ベースとアーキテクチャベースの手法を統合
 - アーキテクチャベースで適応できない場合に、(ゴール指向)要求ベースで(ゴールの変更などにより)対応

論文調査の進め方(例)

▶ 適用事例: 教訓14

- 携帯端末利用営業支援システムにおいて、高負荷時の対策漏れによるデータ滞留が発生
- Chen et al. の適用
 - 必ずしもゴール指向を利用する必要はないのでは？
 - 要求仕様を明確化
 - 高負荷など不具合が顕在化する前に、要求の緩和により対応できるように、少なくとも要求の優先度を明確にする
 - 対応の例: 高負荷時にはデータ解析を一時中断、など

プロジェクトのまとめ方案

- ▶ 別紙発表資料の枠組みに沿ってまとめる